



TITLE:

京大広報 No. 195

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 195. 京大広報 1980, 195: 1113-1122

ISSUE DATE:

1980-04-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209491>

RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 195

京都大学広報委員会



理学部附属琵琶湖古環境実験施設・研究調査船「たかしま」—関連記事本文7ページ—

目 次

卒業式における総長のことば……総長 沢田 敏男…	2
昭和54年度の京都大学創立七十周年記念 後援会助成金交付者……………	4
部局長の交替……………	5
玉田 斑名誉教授、満田久輝名誉教授が 日本学士院賞を受賞……………	5

琵琶湖古環境実験施設の開所式……………	7
本部構内遺跡の発掘調査……………	7
＜随 想＞ 回想の東南アジア研究センター 名誉教授 猪木 正道……………	9
訃報・日誌……………	10

卒業式における総長のことば

総 長 沢 田 敏 男

本日ここに、本学名誉教授の先生方、教職員並びに御父兄諸氏の御列席の下に、京都大学創立七十周年記念に卒業生の寄附で建てられましたこの総合体育館において、昭和54年度卒業式を挙行し、2,440名の新しい学士を社会に送り出すことができますことは、京都大学としまして、また私といたしましても誠に大きい喜びであります。

卒業生の皆さん、おめでとうございます。

皆さんの一人一人に、それぞれの御苦労もあったことと推察し、本日の卒業を心からお慶び申し上げますと共に、小学校から数えて16年ないし18年の長きにわたる学業の課程を終えさせられた皆さんの御父兄の各位に対しましても、卒業生の皆さんと共にその御苦労に対して心からの敬意と感謝を捧げたいと存じます。

さて、皆さんが希望に燃えて京都大学に入学されてから4年ないし6年間、研鑽の功になって、今ここに新学士号を得られたのでありますが、この間いろいろの勉学の仕方があったと思います。皆さんのうちのある方は、自ら学ぶことの楽しさを覚え、また、いわゆる京都学派の学風を肌で感じ得た方もあるでしょう。また、ある方は、学問とスポーツとが両立するよう工夫し、努力を重ねたことでしょう。また、課外活動や自治会活動等に熱中しすぎ、あるいはその他の理由で留年し、今日を迎えた方もあると思います。今振り返って、それぞれの感慨に浸っておられることと思いますが、いずれの方々も、めでたく新学士になられたのであって、この点皆さんは、京都大学の卒業生であるという自信と誇りをもって、今後、大学院進学あるいは実社会への就職等それぞれ次のステップへ大きく前進されるべきであります。

しかし、これからの実社会では、これまでの学生生活と異なり、厳しい服務や義務・責任が負荷されるものと覚悟しなければなりません。そして複雑で多事な社会において職責を遂行するためには、幾多の試練を経験されることと思います。このような皆さんの前途への餞けとして、二、三のことを申し上げてみたいと存じます。

まず第一は、しっかりした価値観をもってほしいということです。

価値観は、われわれ人間生活に対するものごとの貢献度を評価する基準のもとになるものだと考えます。したがって個人により、また年令や環境によって多少異なることは当然であります。現代社会の複雑化や知識の爆発ともいべき科学・技術の急速な発達による価値観の変化、多様化も指摘されています。しかし、人間の本性は知識量の増加によって、さほど変化するものではありません。価値観が、人間生活に対するものごとの貢献度を評価する基準のもとであるならば、これは、時代や世代によって多少の濃淡はあっても本質的に変わるものではないと考えます。現代社会においては、価値観は多様化し変動しているといわれていますが、私は必ずしもそうは思わないのであります。勿論人間生活に対する認識のあり方によって評価基準の内容における力点の置き方は変わるかも知れないし、また基準内容の加減もされるでめいしょう。しかしながら、安易に自己の都合の良い考え方を基準として価値観を云々し、それに基づいて行動することは、誠に慎むべきであると思います。

科学・技術が進歩し、物質的豊かさが保障されつつある現代社会において、近視眼的あるいは迎合的な考え方から、都合の良い価値観を仕立て上げ、いわゆる価値観の多様化を過度に誇張するような風潮に便乗することを惧れるのであります。皆さん、こういう時代こそ、正しいしっかりした価値観をもたなければなりません。

このような現代社会において、しっかりした価値観を養うにはどうすればよいのでめいしょうか。

私は、先人先達の教訓や歴史から学ぶことが最良ではなかろうかと考えます。先人の遺された教訓や歴史・科学史等に謙虚に学び、それらに基づく正しい、しっかりした価値観をもつように心掛けてほしいと望むものであります。

第二に申し述べたいことは、国際交流・国際協力の姿勢や心構えについてであります。

わが国が国際社会へ仲間入りしてから、まだ100年ぐらしかたっていません。しかも、日本語の通用性の低いことや風俗習慣の違いもあり、交流の障害になっていたと思います。したがって、第2次大戦以前の国際交流は極めて少数の人に限られ、これらの人達が近代日本文化の発達に貢献してきたといえましょう。しかし、戦後は広く国民にその機会が与えられ、一般人の海外旅行や外国人の訪日も多くなり、学术交流も盛んになっております。京都大学においても、早くから国際的学术交流の具体化について努力をし、さまざまな分野で成果を上げてまいりましたが、特に最近に至り、アジアや欧米の若干の大学と計画的な学术交流を始めました。また、現在世界の42か国から二百数十名の研究者、留学生の方々が勉学のために来学されています。

本日も、医学部で6年間勉強されたタイ国のレーヌー・ブーンタサターンさんがめでたく卒業され、さきほど医学部卒業生総代として合格証書を受けられました。また、このほかタイ国からの方で経済学士が1名、工学士が2名、マレーシア国からの方で工学士2名、合計しますと6名の外国人新学士が誕生し、誠にうれしく存じます。これらの方々が今後立派な研究者や社会人となって、それぞれの国と日本、また京都大学との親善と学术交流に大きく尽力されるものと期待するものであります。

さらに、昨日挙行いたしました修士学位授与式におきまして外国からの7名の方々が京都大学修士の学位を得られました。さらにまた、昨日の博士の学位授与式におきましても、6名の外国人研究者にめでたく京都大学の博士の学位が授与されています。

このように、京都大学としまでも今後益々世界の国々と交流が行なわれることになりますが、皆さんもこれから大学院並びに実社会の各方面に進まれた場合、各職域において必ずや国際交流の問題に直面されることと思います。その時国際交流・協力についてのしっかりした姿勢・心構えが必要になると思います。この点について特に次のようなことを強調しておきたいと存じます。

まず、学术交流の面においては、世界的に評価され、注目される研究成果をもつこと、これが第一条件です。わが国における科学・技術の模倣の時代は終り、これからは、創造的な研究成果を国際社会にお返しし、貢献するという気概と姿勢が必要であると思います。

また、国際人としての品格をもつように努めることです。国際交流は、結局個人と個人の交流が実質的に基本となるので、語学力のみでなく、それ以上に国際人としての教養、豊かな人間性を備え、専門分野における高い識見をもつことが一番大切なことであります。そして、国際社会に役立つという国際奉仕の精神がその基礎になくはなりません。皆さん、これからの国際社会において真に愛される人となるように努めて下さい。

最後に申し述べたいのは、やはり健康保持についてであります。春秋に富む新学士の皆さん、皆さんのもつ学識を存分に活用できるか否かは、一にかかって健康状態の如何にあるといえましょう。健康に留意し、体力的に自信のある方々におかれても常に節制を守り、体力的に余裕をもって行動できるよう心掛けて下さい。そして前述のように、しっかりした価値観をもち、豊かな国際感覚を身につけた社会人となられるよう祈ってやみません。

どうか皆さん、母校京都大学をいつまでも心の中に抱いて歩いて下さい。京都大学もまた皆さんの歩みをいつまでも見守り続けることでありましょう。

卒業生の皆さん、皆さんの栄えある門出に当たり、心より祝意を表すると共に、一言私の所感を申し述べて饞けの言葉といたします。

(本稿は、3月25日の卒業式における総長のことばの速記をもとにまとめたものである。)

＜大学の動き＞

昭和54年度の京都大学創立七十周年 記念後援会助成金交付者

京都大学創立七十周年記念後援会助成金選考委

員会で決定した昭和54年度助成金交付者は、第1種（海外派遣研究員）17名、第2種（海外からの招へい学者）6名、第3種（海外派遣学術調査隊）1グループ、第4種4名で、それぞれ次のとおりである。

1. 第1種

本学教官が、専攻する学問分野等について調査・研究のため、海外に派遣される場合に助成金（往復航空賃及び日当・宿泊料）を交付するものである。派遣期間は、1) 1か月、2) 約3か月、3) 約6か月である。

派遣期間	所 属 部 局	職 名	氏 名	研 究 題 目
6か月	農 学 部	助教授	久 野 英 二	昆虫個体群の数理モデルと動態解析法に関する研究
〃	教 養 部	教 授	木 下 富 雄	コミュニケーション・フローの研究
〃	原子エネルギー研究所	助教授	今 西 信 嗣	高速イオンによる核反応及び物質との相互作用の研究
3か月	文 学 部	教 授	本 吉 良 治	動物行動の実験的行動分析とエソロジーの研究
〃	経 済 研 究 所	教 授	尾 上 久 雄	社会的費用分析の研究
1か月	法 学 部	助教授	棚 瀬 孝 雄	日独法文化の比較研究
〃	理 学 部	助 手	中 澤 清	「星と惑星系の形成に関するサンタ・クルツワークショップ」出席および太陽系の起源に関する研究調査
〃	医学部附属病院	助教授	藤 原 哲 司	神経学に関する国際学会出席および研究調査
〃	医 学 部	講 師	高 月 清	免疫血液学に関する研究
〃	薬 学 部	教 授	矢 島 治 明	蛋白質化学シンポジウム出席
〃	工 学 部	教 授	赤 井 浩 一	岩盤工学に関する研究調査および「第4回国際岩の力学会議」ならびに「第7回土質基礎工学ヨーロッパ地域会議」に出席
〃	教 養 部	教 授	加 古 三 郎	金属クラスター化合物の構造と反応性に関連する国際会議に出席および資料収集
〃	化学研究所	助 手	松 本 陸 朗	界面およびコロイド科学国際会議出席ならびに研究調査
〃	基礎物理学研	助教授	米 澤 富美子	アモルファス半導体の諸物性に対する理論的研究および国際会議に出席
〃	原子炉実験所	講 師	下 浦 一 邦	放射性廃棄物の処分に関する研究および国際シンポジウム参加
〃	保健管理センター	講 師	三 好 暁 光	学生の精神疾患の予防と治療に関する調査研究
〃	医療技術短期大学部	教 授	木戸上 八重子	ヨーロッパ諸国における看護教育と看護活動に関する研究調査

2. 第2種

海外から学者を本学に招へいし、講義・研究指導等を依頼して、その分野の研究発展をはかるために助成金（往復航空賃、鉄道賃及び滞在費）を交付するものである。招へい期間は、原則として1～3か月である。

受入期間	招へい学者名	国名・所属機関及び職名	研 究 題 目
教育学部	M. J. Langeveld	オランダ国 オランダ学士院会員 Utrecht 大学名誉教授	人間学・教育学・発達心理学・児童人間学および臨床教育学の理論と実際
法学部	Wolfgang J. Mommsen	ドイツ連邦共和国 ドイツ歴史学研究所 (ロンドン) 所長 Düsseldorf 大学教授	ドイツ近・現代史 (マックス・ウェーバー研究) (帝国主義時代研究) 史学理論
理学部	James M. Goodwin	アメリカ合衆国 California 州立大学 教授	低温物理学 臨海点近傍における液体ヘリウムの粘性の研究

教 養 部	Heinrich Mitter	オーストリア国 Graz 大学主任教授	理論物理学, 特に量子力学, 素粒子論 レーザーを用いた強電磁場の中における 量子 電 気 力学の研究
経 済 研 究 所	Dale J. Poirier	アメリカ合衆国 Toronto 大学准教授	計量経済学 電力需要と料金体系の計量経済学的分析
ヘリオトロン 核融合研究セ ンター	Horst Wobig	ドイツ連邦共和国 Max-Planck・プラズ マ物理学研究所 主任研究員	プラズマ物理学, 核融合

3. 第3種 (海外派遣学術調査隊)

海外において, 調査研究を行う本学の学術調査隊であって, 原則として国費などの支給を受けるものを対象として, 助成金 (調査に要する経費と支弁される国費との差額の一部) を交付するものである。

代 表 者	調 査 名
理 学 部 助 教 授 中 川 一 郎	重力計定数の高精度決定および国際重力基準網 1971年の維持改良に関する研究 (予備調査)

4. 第4種

総長及び総長が大学行政上特に必要と認めたものの外国出張等に対し, 助成金を交付するものである。

職 名	氏 名	期 間	派 遣 目 的
総 長	岡 本 道 雄	昭和 54. 5. 3~昭和 54. 5. 15	欧州諸国との学術協力ならびに大学入試制度についての資料収集・実情調査および関係機関との協議のため
〃	〃	54. 7. 31~54. 8. 5	日韓両国間の学術・教育上の交流に関する意見交換および高等教育機関の実情視察のため
庶務部庶務課 秘書掛長	北 原 保 男	54. 5. 3~54. 5. 15	欧州各国における高等教育研究機関の管理運営および学術の国際交流に関する実情調査のため
庶務部国際主幹 付第一渉外掛長	渡 部 健 吉	55. 2. 5~55. 2. 16	東南アジア諸国の教育・研究機関における学術交流の実情および同機関の管理運営についての調査のため
(招へい) 大 韓 民 国 慶北大学総長	徐 燾 珏	55. 2. 5~55. 2. 7	慶北大学と本学との学術交流について協議のため

部 局 長 の 交 替

医学部附属病院長

4月2日, 西村敏雄医学部附属病院長の任期満了に伴い, その後任として塚原 勇医学部教授 (眼科学講座担当) が任命された。任期は, 昭和57年4月1日までである。

ウイルス研究所長

4月2日, 植竹久雄ウイルス研究所長の任期満了に伴い, その後任として松本清一ウイルス研究所教授 (癌ウイルス研究部門担当) が任命された。任期は, 昭和57年4月1日までである。

放射性同位元素総合センター長

4月2日, 重松恒信放射性同位元素総合センタ

一長の任期満了に伴い, その後任として葛西善三郎食糧科学研究所教授 (食糧生産研究部門担当) が任命された。任期は, 昭和57年4月1日までである。

玉田 珖名誉教授, 満田久輝名誉教授
が日本学士院賞を受賞

このたび, 玉田 珖名誉教授および満田久輝名誉教授に日本学士院賞が授与されることになった。授賞式は, 6月上旬, 日本学士院会館で行なわれる予定である。

以下に両氏の略歴, 業績等を紹介する。

玉 田 珧 名誉教授



玉田 珧名誉教授は京都府出身、昭和15年大阪帝国大学理学部物理学科を卒業、引き続き同大学理学部助手、同20年本学理学部講師、同24年助教授に任ぜられた。昭和29年に大阪市立大学教授として理工学部勤務し

たが、同31年本学教授となり、工学部航空工学教室において空気力学講座を担当、同41年に流体力学講座に担任換えとなり、航空工学、特に空気力学および流体力学の研究・教育に尽力され、同54年退官後は大阪産業大学工学部教授となり現在に至っている。

同名誉教授の今回の受賞の対象となった研究課題は「翼を過ぎる遷音速の流れならびに関連する問題の理論的研究」である。航空機の高速化に伴い、空気の圧縮性が問題となるが、同名誉教授は圧縮性の影響を逐次近似的にとり入れる解析を遂行し、高速機の開発に有益な指針を与えた。続いて、この逐次近似が無力となる遷音速流の研究に進み、今日「遷音速近似」と呼ばれている普遍的な非線型支配方程式を導出した。次に、同名誉教授は特殊な変換によってこの方程式を線型化し、特解群の合成に独創的な工夫をこらして流速零より遷音速の範囲まで良い近似で成り立つ解を求め、特殊な翼型「玉田翼」のまわりの流れを計算した。そして、流れの速度が局所的に音速を越えても、衝撃波を伴わない連続的な流れが存在し得ることを初めて明らかにした。これは今日の遷音速輸送機に使用されている「超臨界翼型」を肯定的に予測したものとして高く評価される。

同名誉教授は電磁流体力学、希薄気体力学および放射気体の力学についても卓越した研究を遂行した。すなわち、弱電導性流体の渦後流の存在を見出し、希薄な気体の流れの構造と特性を明らかにし、放射気体内の温度場を放射輸達方程式によって厳密に解析することに成功して、航空および宇宙航行の発達に伴う新しい現象を理論的に解明し、将来の展開に的確な予測を与えた。さらに、同名誉教授は柱体を過ぎる低速の粘性流のさまざまな特性をも解析的に明らかにしている。

同名誉教授は温情のこもった誠実な人格によって、多数の研究者・技術者を育成し、また昭和40年から9年間、本学工学部附属電離層研究施設教授を併任、日本航空宇宙学会関西支部長、流体力学懇談会運営委員長、科学技術庁航空技術審議会専門委員、日本学術会議力学研究連絡委員会委員を歴任して学術行政にも貢献した。

以上のような研究・教育の両面における同名誉教授の業績を考えると、今回の受賞はまことによろこばしい。

(工学部)

満 田 久 輝 名誉教授



満田久輝名誉教授は大阪府出身、昭和12年京都帝国大学農学部農林化学科を卒業、同27年本学化学研究所教授、同30年本学農学部教授(栄養化学講座担当)となり栄養化学・食品工学の研究・教育に尽力され、同53年停

年退官後引き続き甲子園大学学長に就任し現在に至っている。

今回受賞の対象となった研究課題は「ビタミン B₂ の生合成機構に関する研究とその応用」である。同名誉教授は本学在職中、ビタミン B₁、B₂、Cならびに葉酸の植物生化学的研究を発展させ、特にビタミン B₂ に関する研究は代表的業績の一つで、国の内外で高く評価されている。すなわち、動植物組織中のフラビン化合物の分布とその生化学的研究を遂行中、緑葉には多種類の未知蛍光物質が存在することを知り、その中の1種は、高フラビン生産菌から分離・確認されたビタミン B₂ の前駆物質(G物質)にほかならないことを見出した。引き続き、G物質からビタミン B₂ を酵素的に生合成する系が、すべての緑葉中に存在することを初めて実証すると共に、B₂ 全生合成経路の大半を詳細に解明しビタミン学の分野に大きな足跡を残した。ことに単一酵素表面上で2分子のG物質から1分子のビタミン B₂ が生成され、かつこの反応の副産物がG物質生合成系の直前の前駆物質でもあることを証明し、また各種ヌクレオチドがビタミン B₂ の生合成のみならず、フラビン補酵素(FMN, FAD)の生合成と生分解を調節

する因子であることを発見した。ことにアデノシン・3・リン酸(ATP)がフォスファターゼを強力に阻害する事実を初めて見出したことなどはビタミン学の領域のみならず生化学全般にわたって意義深いことである。

同名誉教授は、これらの基礎研究を通じて得られた知見を広く食品工学の分野に応用することにも努めた。例えば、ビタミンCによるビールの混濁防止、ビタミンB₁・B₂強化米の創製、炭酸ガスによる冬眠密着包装法の開発などがある。

同名誉教授は、また、これら研究のかたわら、該博な専門知識をもって国内では日本学術会議会員、日本学術審議会委員として、国際的にはFAO・WHO・UNICEF 合同タンパク質諮問委員会委員として栄養・食糧問題の改善に尽力した。また学界の発展にも指導的役割を果たし、国内では日本栄養食糧学会会長、日本ビタミン学会会長、国際食品工学会ジャパンセクション会長、

日本国際食品工学連盟理事長の要職を歴任し、国際的には第10回国際栄養学会議組織委員長、第5回国際食品科学工学会議会長の重責を全うした。昭和47年12月「米の栄養と米の貯蔵」について新宮殿で御進講の栄に浴している。また、数々の学術上の業績に対し1974年栄養・食糧科学の世界最高の栄誉であるインターナショナル賞を受賞している。

同名誉教授は、学内にあっては本学評議員として教育行政にも努力し、昭和42年本学農学部食品工学科を創設し、また本学の体育会会長として永年学生の課外教育にも貢献し、また本学創立七十周年記念事業による京都大学総合体育館や京大会館建設の責任者として諸事業を完遂した功績も大きい。

以上のような同名誉教授の輝かしい研究・教育上の業績を考えると、今回の受賞はまことによろこばしい。

(農学部)

＜部局の動き＞

琵琶湖古環境実験施設の開所式

琵琶湖の湖底堆積物を掘削採取し、その総合解析から過去400万年間の地球環境の変遷史を解明することを目的とする理学部附属琵琶湖古環境実験施設は昭和51年度に設置が認められたが、その研究棟、冷凍庫を含む管理棟および研究調査船「たかしま」が昭和53年度に竣工した。本格的な研究を開始するに当たって、去る3月26日に沢田敏男総長ならびに滋賀県当局および地元からの来賓約50名列席の下に現地で開所式が行なわれた。本実験施設は琵琶湖西岸高島町荻の浜湖岸にある。

(理学部)

本部構内遺跡の発掘調査

京都大学構内遺跡調査会(会長 亀井節夫理学部教授)は、2月1日から吉田地区本部構内実験排水槽の建設予定地(面積400㎡)の発掘調査を始め、現地の調査を3月31日に終了した。

今回の調査で検出された遺構は、奈良後期から近代にいたるもので、堅穴住居跡・土壌墓・不定形土坑・溝・道路などがある。そのうち、おもな

遺構について説明し、それから考えられる本学本部構内の歴史的変遷について言及する。

◆堅穴住居跡 一辺3mの隅丸方形に地面を掘り込んだもので、南北にならんで2基確認した。いずれも床面が2枚あり、改築の時に西へすこし拡張した形跡もみとめられる。4つの柱穴が中央部にみられ、出土した土師器・須恵器から奈良後期～平安前期のものと考えられる。本学構内では、堅穴住居跡の発見は、これがはじめてである。

◆土壌墓 堅穴住居跡を切る土壌墓が検出されている。土壌の底部で鉄釘が多数出土しており、それらの位置関係から、0.6m×1.9mの長方形の木棺に遺骸が納められていたと推定される。その北西隅には、11世紀のものと考えられる中国産定窯系白磁小碗が副葬されていた。このほか鎌倉時代の土壌墓が、少なくとも2基検出され骨も出土している。

◆溝・道路 調査地域内には3本の溝がみとめられたが、そのうち幅2.5m、深さ1.5mのV字形をなす溝からは、多くの遺物が出土し、越州窯系青磁碗が目目される。上層・下層に分層しうが、それぞれ鎌倉後期・鎌倉前期を下限とする遺物を含んでいる。この溝は、ほぼ南北に13m検出され

たが、調査区外にもびている。この溝とほぼ平行して道路が検出されている。断面の観察から、少なくとも3枚の路面がみとめられ、それぞれの上面は小礫を堅く敷きつめた舗装を行なっている。東西には浅い側溝があるが、西側溝は新旧2つを数えることができ、当初、幅2.4mの道路を0.3m程度西へ拡張したようである。側溝・路面からは瓦や陶磁器の小片が出土したが、いずれも近世のものと考えられる。

本学吉田キャンパスでは、奈良時代から平安前期にかけての遺構は、これまで北部構内を中心に確認されてきたが、この北白川の地は奈良時代には上栗田郷とよばれていた。ここには奈良前期に創建された北白川廃寺が存在し、この地を本貫とする栗田氏の活躍が考えられる。畿内では、この時代には堅穴という縄文時代以来の伝統をもつ住居形態は、消滅していたといわれているが、今回発見された堅穴住居跡についても、平安遷都前後における、鴨東の開発の動向などと重ね合わせて検討する必要がある。

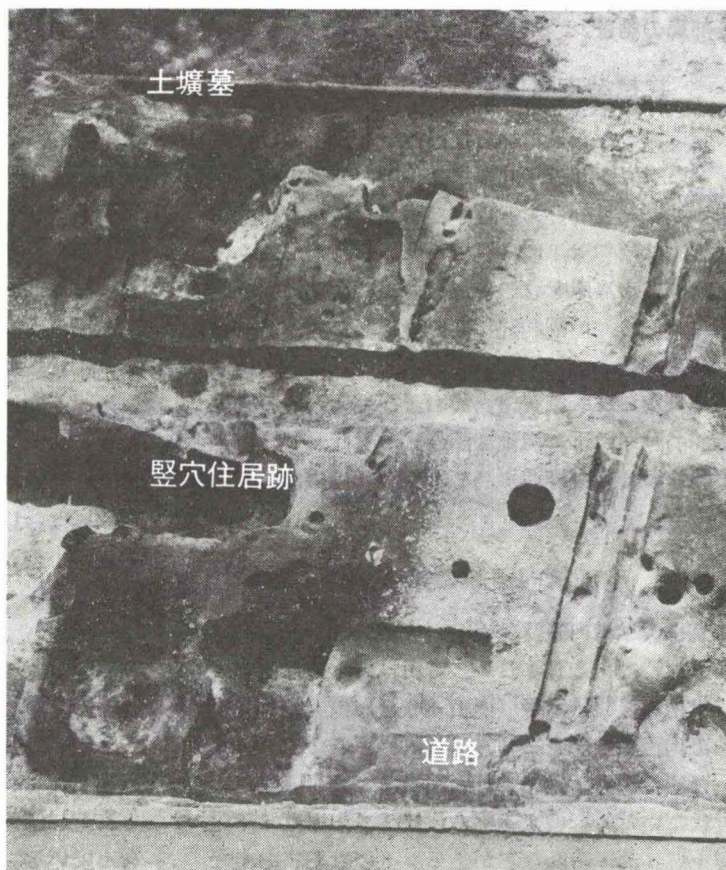
平安遷都以降、京の外郭部たる吉田の地には、寺院・神社・邸宅などが造られるにいたるのであるが、『権記』長保3年(1001年)6月20日条記事の「吉田社北三丁内有葬送之處」という記載に示されているように、神楽岡(吉田山)周辺は葬地となっていたようである。現在でも数多くの陵墓が存在し、北部構内では昭和52年に火葬塚が発見されていることもこれを裏書しているといえよう。今回検出された土壙墓も、そうした神楽岡周辺の葬地に含まれるであろう。

昭和54年に本部構内で、はじめて発掘調査が行なわれたが、その際、2面の道路遺構を確認し、それが中世・近世の白川道であることが明らかになった。そして荒神口から北白川を経て近江に至るこの街道が、本部構内の地域においては、新旧二つ存在し、その新道

についても、数次の改修や補修が行なわれたことが確かめられた。今回発見した道路は、吉田神社南参道・表参道の西を北行し白川道に連続するもので、江戸時代から存続し、明治20年この地に三高が建設された時、廃絶するに至ったものと考えられるが、それは近世の絵図や明治初期の地図にみられる道路変遷に符合する。また前述の如く、道路と溝が、ほぼ平行することからして、この地域の旧道は古くから、ほぼ南北方向に存在していた可能性があることを指摘したい。

以上が今回の発掘調査の概要であるが、比較的狭い調査区において、この地の歴史の変遷を考えるうえで重要な遺構を多数確認できた。また、地下に埋もれた遺跡の調査によって、文献資料にとぼしい平安京遷都以前の鴨東の地の歴史的景観も徐々に解明されつつあると考える。こうした意味で貴重な埋蔵文化財についてのご理解をたまわれば幸いである。また発掘調査に関係された各位のご協力とご支援にお礼申しあげる次第である。

(埋蔵文化財研究センター)



計 報

吉川 幸次郎（本学名誉教授・文学博士）

4月8日逝去，76歳。大正15年本学文学部文学科卒業。昭和22年本学文学部教授就任，同42年停年退官。そ

の間評議員（昭和26年～28年および同30年～31年），文学部長（昭和31年～33年）を歴任。昭和44年文化功勞者。昭和49年勲二等旭日重光章受章。専門は中国文学。

日 誌

（1980年3月1日～3月31日）

3月4日～5日 入学者選抜学力試験（第2次学力検査）実施
 // 医療技術短期大学部入学者選抜学力試験実施
 8日 ドイツ連邦共和国在大阪神戸ドイツ連邦共和国総領事 Wilhelm Löer 氏外3名来学，総長と懇談
 11日 評議会
 12日 安全委員会
 // バングラデシュ国バングラデシュ・ユネスコ国内委員会事務局 Md. Abu Saleque 氏外4名来学，事務局長と懇談および工学部，木材研究所施設見学
 19日 国際交流委員会
 // 環境保全委員会
 21日 医療技術短期大学部卒業式・専攻科修了式
 // 発明審議委員会
 // 原子炉実験所学術講演会
 // タイ国 Thammasat 大学長 Prapasna Auychai 氏来学，総長と懇談および東南アジア研究センターを訪問

22日 創立七十周年記念後援会助成金選考委員会
 24日 修士学位授与式
 // 博士学位授与式
 // アメリカ合衆国教育省極東担当上級専門官 Robert D. Barendsen 氏来学，関係教官と懇談
 25日 卒業式
 26日 附属図書館商議会
 // 理学部附属琵琶湖古環境実験施設開所式
 // フランス国パリ国際大学都市財団理事会理事 Bernard Chenot 氏来学，総長と懇談
 // アメリカ合衆国 Oglethorpe 大学学長 Manning M. Pattillo, Jr. 氏来学，関係教官と懇談
 28日 大韓民国 Seoul 大学自然科学部長高允錫氏外2名来学，関係教官と懇談
 31日 サウジアラビア国 The King Abdul Aziz 大学事務総長 Muhammad Ali Hibshi 氏来学，総長と懇談